

# は じ め に

学校長 角 本 順 次

今回の研究発表会は、本校創立10周年記念行事の一環をなすものとなった。それと同時に、本年度後半にあいついで行われた一連の記念行事、すなわち創立10周年記念大運動会(9月)、同じく記念学習発表会(11月)、それに記念式典・記念講演会(12月)などのあとをうけ、これらをしめくくる最後の行事となる。

いま改めて本校10年の歴史をふり返るとき、その礎石を築いて下さった先輩教員諸氏の功を思わずにはいられない。またこの間、本校の施設設備の拡充に尽された関係部局の、よき理解に感謝せずにはいられない。われわれの毎日の教育実践も、従ってここにお示しする研究成果も、これらのかたがたに負うところが大きいのである。

さて、今次の発表は、われわれが「発達と障害に応じた教育をめざして一個に視点をあてた指導の実践」という研究主題を掲げて3年目の、またその最終年次に予定しているものである。そのとり組みの内容は、年次により、学部によりおのずから異なるところがあり、これはあとの「研究経過」において示されるので、ここでは触れないが、これまでのとり組みによって、われわれは大きなものを得たという、確かな手ごたえを感じている。その最大のものは、なんといっても、ひとりひとりの生徒たちにしっかりと「伸び」が見られたということである。この、当り前のようでもあり、また皮肉な見方からすれば「手前みそ」ともいわれそうな変容を、読者は個々の実践記録の中に見出すであろう。次に、われわれがこのとり組みを通じて実感するのは、この子らも、かくすればかく伸びるといふ確信を得たということである。離れて遠くから見ているだけでは気づかないような、しかしながら近づいてよく見ればハッキリわかるほどの成長をひとりひとりが遂げており、それを自分たちの手で作り出したという思いを禁じ得ない。まことに、この子らの可能性を見せつけられる思いであり、ヴィゴツキーの「教育が発達を作り出す」とのことばが真実味を帯びて来る思いである。

そうはいっても、われわれの実践にはまだまだ不十分なところも多いのを承知している。自己満足におちいって、障害児教育がわかったように思いこむ愚をおかしてはなるまい。そのような自戒を新たなものにするために、率直なご意見や厳しいご指摘をいただきたいと思う。

最後になったが、今回もまた鳥取県教育委員会、鳥取市教育委員会、鳥取県特殊学校校長会、鳥取県特殊教育研究会、鳥取県東部地区特殊教育研究会から研究発表会の後援を頂いたことに深い謝意を表したい。